

人生のすべてを知って

人は誰も彼も、生きることを土台にして、一切の営みを続けている。それが人間の生活ではある。生きるつもりで学問し、生きるつもりで家を建て、生きるつもりで手術を受け、生きるつもりで薬を飲む。

「生き得るぞ！」と強く主張すれば、まちがった思想、まちがった宗教、まちがった教えと知りつつ万一を当てにし、そこに引きあいに出された特殊の例話によって、「私の場合も」と思つてそれに入つてゆく。近頃の日本のさまざまな迷信や、思想の流行はこれに原因するのではあるまいか。

そうした功利的な心よりも、どんな場合にも「正しい道」を求めると言うことは、よほど深い信念がないと出来ないことである。しかも、我等は、どんな場合にも「真実教」のみ旨むねによつてのみ動かして頂く覚悟でなくてはならない。

念仏行者のように見えた人が、一家の中に病人でも出来ると、背に腹はかえられず、つい現世祈祷に走つてゆく。

名利のための仏法ではないと知りつつ、食われない、出世出来ないとなると、お安く仏法を売つて、旅芸人のように、浮身をやつして世に媚びはじめ。「正しき」を保つてゆくには強い信念がある。それでは生きてゆけないと言いわけしつつ、一度こゝわれてしまうと、何等の風格のない人が出来る。一時は渡れるようでも、そのうちに行きづまりが出来て、ほんとうに生きられない人になる。

まちがいと知れば翻然として捨ててゆく。道を生きる者には大切なことである。

十八歳になつた中学四年の増井茂君は、私が台湾にゆく前日に会つてお話をすると、それから重い肺患の床に念仏しつつ、私の帰るのも待たないで、ほんとうに静かに安らかに浄土へ往つた。

父君の話に、初め、生長の家の本を読んで感心したようなので、月刊雑誌をとつてあげると、二月三月した時に「何だ、まちがったくだらないことを書いている」と言つて捨てて、それからは読まなくなったそうだ。重くなつて「道徳科学」を信ずる人が、神棚を持つて来たり、毎日のように来て介抱したりしても、嫌つて断つたそうだ。それだから、念仏の尊さが早くわかつて、一切を超えて念仏する静かな生活に微笑み得たのであろう。

「あなたは、何故に真言宗でもないのに、浄土宗の僧侶たる者の寺に、お大師さんの札所をおきますか。」と言つたことがある、しかも、その人は長らく浄土真宗を聞いた人である。何が正しいかを知りつつ、それを捨てることが出来ない者に念仏の生活はわからない。

仏のすてしめたもうをすて、仏のとらしめたもうものをとる。それが仏家の家風であつた。たとえ一時は不都合のようでも、み教えのままに清算しきつて歩めば、必ず広い道が開いて来る。この一事が欠けたら、仏道の無碍の道味はわからない。

世尊は、人生の苦悩をまともに受け取られた。生老病死の事実を、事実として領解して、そこに不滅の法身を得られたのである。「死ぬる者」にも、この神を信じたら病が癒つて「生きられる」と主張するところに、人にとりつきやすい迷信がある。しかし、生きることの裏には、老病死が横たわっていることが事実である。だから生の主張ばかりに立脚した一切の思想、科学、宗教、等々は、人間の問題の最後の解決にならないのである。

医者とは、「病気を治す仕事」であると考える。病気を治す科学のみに没頭した医師に、不治の病がつくと、そこに何もわからない一個の子供が横たわる。迷信でも何でも信ずる人間が。

正木ます子さんは胃癌になつて九大病院で七分まで胃袋を切りとられた、一時よいようであつたが、また痛み出して、もはや手のつけようがなく、日下部外科で一夜泊まつて村に帰つた。帰るや、私とこの世の最後の別れをした。しかし彼女は念仏三昧で少しも乱れてはいない。死の床に、無量寿の太行に乗托している。その子の信江さんからののがきに言く、

「合掌南無阿弥陀仏、先日はまことに／＼有難うございました。久しぶりにしかも最後の近づいた今、御慈父様の温容に接し、あの有難い数々の御ことばを戴いて、母も私もそして父も、有難く／＼合掌させて頂いています。『その静かなること林の如し。』静かな／＼母の心境を想うたび、その背後にいよいよ輝きます如来の偉大な御徳に、思わず合掌さして戴かずにはいられません。母がよくもこゝまで育て、頂いたものだと思います。しばらく先生にお会い出来ずにいても、やはり最後には、先生のもとに帰らして頂きましたことの宿縁の、あまりにも深く尊いことをいよいよ有難く存じます。眼が薄くなりますので、御餞別のお言葉を父が清書して御部屋にはりました。私は水曜の朝、学校に出ましたがその節も『便あらば住岡先生によろしく、私は有難く死んで行きます』と床の中から申しました。』
こうして書いている時、信江さんから又はがきが届いた。

「合掌南無阿弥陀仏、御なつかしき先生、事々につけて先生のことを思い出します。心ある方にお会いするたびに、母も先生に御会いさせて頂いて御縁に会わせて頂いたことを語りながら、衷心よろこんでいます。母の容態も漸く弱つて来ましたが、又この二三日、急に衰弱して参りました。こみ上げる腹と、そして腸の閉塞とに苦しんでいます。嘔吐もひどいのがひっか／＼やって来まして、死の苦痛を傍観することさえ、まことに／＼痛ましく存じます。しかし先生喜んで下さいませ。苦しい中から落付きはらつて御称名させて頂いています。私は、母の姿を拝む度に日本一に恵まれた子だと言うことをほんとうに味わって頂いています。」

死の床に念仏している四十四歳の一生、まだ幼い子のある身、死にたいのではない。しかし死にたくないまゝに、お念仏の人には安らかさがある。

死を見たからとて昏乱するのではない。永遠絶対の世界がわからないから昏乱するのである。

人間の世界の一切に直面したからとて行きづまるのではない。如来金剛の本願力に乗托して人生の真相に当面しないからである。人生の現実から逃避しようとするばするだけ、人は墮落し、迷い、昏乱し、行きづまる。しかし如来の智慧力によらねば、人生をありのままに受け取って超える力は与えられない。

如来の大慈悲は、金剛の信力を廻向成就して、真に生きる全人を化生する。真の光は念仏の上のみ輝く。

念仏の大信は、人間のありのままの業苦を受け取り、内観の世界に眩劫の闇を凝視し、人生の真相をそのままに知って開く光の世界であるが故に、ついにいかなる時にも滅ばない歓喜の一道、無碍の一道たり得るのである。

念仏の子は、不滅の喜び、永遠の幸福の持ち主である。それ故に、人生の真相をそのありのままの相において受け取り得るのもある。

一切の暗を、生死を、業苦を超えたもうものは、それは如来の法身のみである。如来の法身は名体不二の名号となつて、人生に神通応化し、内観の世界に影現して、衆生の自覚の本性となつて下さる。念仏の子は、不滅の弘誓に生かされて、その光によつて人生のありのままに随順する。合掌の相はかくして真に人生を超越する者の相である。